

新養殖対象種の導入に関する技術開発試験 (マガキ浮遊幼生出現状況調査)

増養殖環境課 山下 樹徹・高橋 紀行

1 背景・目的

マガキ養殖においては、天然採苗で種苗を確保する 경우가一般的である。本調査では、マガキの天然採苗を検討するために、浮遊幼生の出現状況を調査した。

2 方法

「アサリ浮遊幼生出現状況調査」時に得た試料に含まれるマガキ浮遊幼生について、国立研究開発法人水産研究・教育機構瀬戸内海区水産研究所から提供を受けたモノクローナル抗体を用い、直接蛍光抗体法で計数した。

3 結果

マガキの浮遊幼生は調査を開始した5月から出現しており、St.1及び2における出現密度のピークは、それぞれ8月30日(10,740個/1,000L)及び7月18日(9,080個/1,000L)であった(図1)。11月以降の出現密度は低下し、12月11日におけるSt.1及び2の出現密度は、それぞれ40及び0個/1,000Lであった。

4 考察

浦ノ内湾におけるマガキ浮遊幼生の出現状況は、有明海や広島湾と同じく夏期が中心であったことから(今井ら1971)、これらの海域で実施されている採苗方法を参考にすれば、浦ノ内湾においても天然採苗が可能であると推察される。

また、9月13日は、その前後の調査日と比較して、出現密度が極端に低かった。この時期には、二枚貝に被害を及ぼす赤潮プランクトン *Heterocapsa circularisquama* の発生が確認されており、何らかの影響を及ぼした可能性がある。

5 謝辞

国立研究開発法人 水産研究・教育機構瀬戸内海区水産研究所の浜口昌巳グループ長にモノクローナル抗体を用いたマガキ浮遊幼生の同定手法について、ご指導いただいた。記して感謝の意を表す。

6 引用文献

今井丈夫・猪野峻・黒木宗尚・藤永元作・山本護太郎(1976)カキ養殖の技術. 改訂版 浅海完全養殖, 153-189.

マガキ浮遊幼生出現状況調査

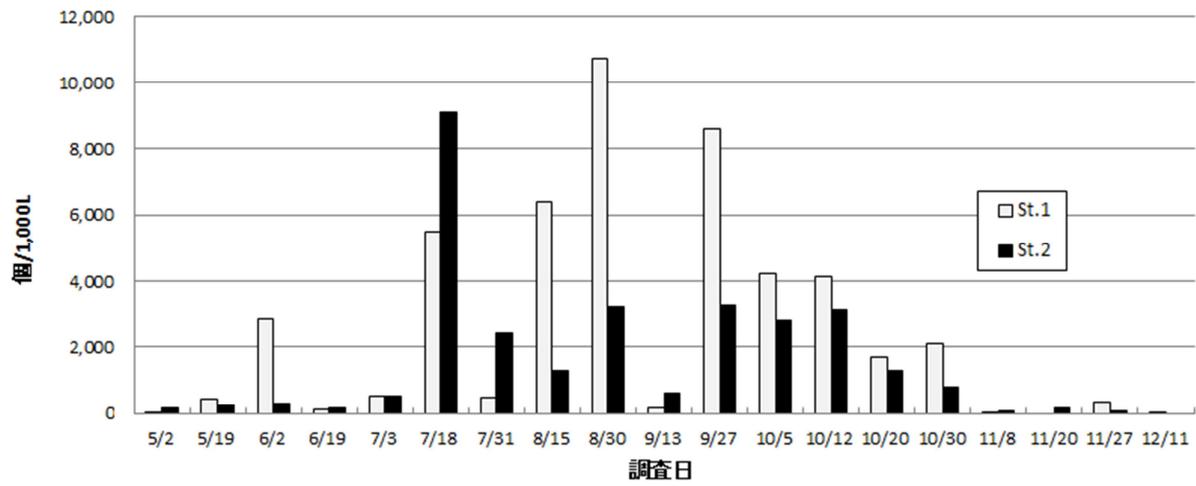


図1 平成29年マガキ浮遊幼生状況調査結果